

障害児の学級参画におけるメンバーシップの不確定性

——「児童／障害児」カテゴリーの棄却と前景化——

大阪市立大学都市文化研究センター 佐藤貴宣

1 目的

本報告の目的は、通常学校に在籍する全盲児に原学級のメンバーシップを付与すべく、教員が行う活動を分析することにある。その際、近畿地方のA市内に立地するA小学校において、全盲児である詩織（仮名）と直接関わってきた加配教員と原学級教員の語りを取り上げる。具体的には、両者が「児童」と「障害児」というカテゴリーを用いて詩織を原学級に包摂していく作業を分析する。

2 データと方法

本報告が主な分析対象とするのは、加配教員（S）と原学級教員（X）に対して実施したインタビューによって得られたナラティブである。Sは詩織が1, 2年次（2012年度, 2013年度）の支援学級担任である。Sへの面接時間はおよそ2時間30分で、インタビューは2014年6月21日にSの自宅において行った。また、Xは、Sが詩織の支援学級担任であった時期（1,2年次）に原学級を担任していた教員である。Xへのインタビューは2014年8月30日にA市内の喫茶店で約2時間行った。さらに、本報告では、これらのデータを補完する目的で、参与観察によって得られた観察データも適宜引用する。

これらのデータを分析するに当たって、主にヘスターとエグリン（Hester & Eglin 1997）が提唱してきた「成員性カテゴリー化分析（membership categorization analysis=MCA）」のアイデアを援用する。つまり、本報告においては、メンバーによって日常の活動が成し遂げられるとき、成員カテゴリーや成員カテゴリー化装置、カテゴリー述部がいかにかに用いられるのかを分析する。特に、ワトソンによる一連の議論（CF. Watson 1987）を参照しつつ、既に同定されたカテゴリーを他のカテゴリーへと再配置する仕方とその帰結について考察する。

3 結果

分析の結果、「児童」カテゴリーから詩織を切断し、「障害児」カテゴリーを執行する手続きを通じて、担任に対して自らへの配慮を要求する詩織の権利を限定し、詩織に対して配慮を提供する担任の義務を部分的に解除することが可能となっていた。その結果、詩織は「担任」カテゴリーとカテゴリー対を形成する「児童」カテゴリーの担い手としてではなく、「加配教員」カテゴリーとカテゴリー対を形成する「障害児」カテゴリーの担い手として同定され、その限りにおいて詩織の原学級への参加はかろうじて保障されていたことが明らかとなった。

4 結論

以上から、原学級への詩織の参画を保障するに当たって重要なことは、当該学級という具体的なコンテキストの内部で「教師」カテゴリーとの対関係において喚起される「児童」カテゴリーへと詩織を明確に位置づけていくことの必要性が確認された。それは、加配教員というカテゴリーに期待可能な形で結びついている責任や活動を、原学級担任へと徐々に配分していくことである。その過程を通じて、詩織の学級参加は漸次的に十全なものとなっていくことが示唆された。

【文献】

- Hester, S., & Eglin, P. (1997). *Culture in action: Studies in membership categorization analysis*. University Press of America.
- Watson, D.R. (1987). "Interdisciplinary considerations in the analysis of pro-terms." In G. Button and J.R.E. Lee (Eds.), *Talk and Social Organisation Clevedon: Multilingual Matters*.